

相当な時間と紆余曲折が有り決して平坦な道ではなかった。

私の[宿命]のバトンは、[運命]の運び方次第で変わっていくのだ。更に在日一世たちの苦労や悲哀を思えば、その運び方に責務も生じるので、自分勝手な無責任なマネジメントだけは絶対に避けたい思いもある。

次に、幼少期からの記憶や原体験をもとに、思春期までの成長過程を振り返りながら、忘却の彼方に埋没し兼ねない自身のアイデンティティーの欠片を探っていきたいと思う。

◆強くなければ生きていけない…

在日二世として産声をあげた私は、両親と家族の愛情に支えられすくすくと育った。在日とい韓国社会での成長は、自然と多極的な見方を育んだように思える。周囲との違和感を生活の中で垣間見るときに、感じた疑問を幼児期はまず親にぶつけるものだ。この時に親の対処の如何が後の価値観の礎にも成り兼ねないので、どの親も幼児期に直面する我が子の質問には、熟慮が必要だ。

幸いにして、私の両親は[人間としての倫理観]を最優先に真摯に生きてきたので、ダイレクトな親の言動には、その都度自分なりの[納得解]に至ったように思える。それは、すぐに納得できた解もあれば、とてつもなく時間を要した解もある。小学校に上がるまで東成の大成通りのボロ長屋に、祖父母と両親、兄弟4人が所狭しと、ひしめきながら暮らした記憶は、懐かしく又鮮明だ。工場の事務所も兼ねた長屋だった故に、幼いころから仕事に追われる父とも毎日顔を突き合わせる。やんちゃ盛り私は、常に父に叱られる役目だった。長男への嫉は他の兄弟姉妹と差別的と思われるくらい徹底していたので、その腹癒せで、よ陰で弟にハつ当たりしたものだ。祖母は日本語もたどたどしく半分韓国語交じりで話すので、韓国語特有のアクセントや発音は自然と耳慣れてくる。日本語の濁音が苦手な発音形態から、韓国人特有の日本語発音の祖母と共に行動する時は、子供心ながら恥ずかし感じてしまい、祖母を責めたことは今なお心残りである。生まれた時から日本語しか話さず、全てを日本語で思考発想する二世の私は、母国語は日本語である。言語の持つアイデンティティーは、絶大だから母国語で育む私の感性は、日本語で磨かれたことと言える。

要は、ヒトは大地で生まれ、大地に根ざすのが自然の成り行きだから、私の故郷は日本である。

世界の至る所でマイノリティーは存在するが、基本的に生まれた国の言語を母国語として思考する延長上での国籍が、本来ならば一番自然体になれるだろう。理想を言えば、民族性の尊厳も加味した異文化をも認め合う社会は、多様性と弾力のある豊かな社会を構成し得ると思える。

単一に同化を求める社会は、原理主義の危うさに繋がる恐れもあるかも知れない。例えば、人種のるつぼであるアメリカ社会での、～系アメリカ人というのは、先祖が明確で分かりやすい自然な形態だと思える。旅好きな私は、これまで幾度となくアメリカ大陸を周遊してきたが、一番驚いたのは、どう見てもアジア人の私に、現地のアメリカ人から道を尋ねられることだった。島国の日本で育った私には驚きで、外国人とアメリカ人との区別がつかないくらいにアメリカ社会は人種間が多様でるつぼ化され、共生している社会を実感した。もちろん、中華街やイタリア街や韓国街、ロシア街、黒人街、スパニッシュ街などと、地域社会が住み分けされた街も点在し、各々のマイノリティーが共存するのだが、皆、アメリカ人としての国家への忠誠を最低限のルールとして繋がっている移民国家社会を実感した。皮膚の色から、容姿から、明らかに他民族と分かりながらも、根底のアメリカ人としてのアイデンティティーを共有している感した。日系アメリカ人、韓国系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人、イタリア系アメリカ人、といった人種構成も地域や州によってまちまちで、スパニッシュ系が大半な地域では、英語さえ通じない地域もあったくらいだ。しかし、ここ日本では厄介なことに、容姿や外観からは区別が付きにくい民族的な差異を、共通言語の日本語を話す限り認識しにくい現実と直面しなければならなかった。

例えば、民族差別感情なども日本ではどうしても陰湿になり、島国特有の単一民族の意識からか、異分子への受け入れ感情が複雑かつ閉鎖的で、日本への同調圧力が強い環境もあって、特に韓国系、朝鮮系の在日社会では、俗に呼称する[通称名]を大半使用しながら、日本社会に根付く在日も多い現実がある。在日自身の被差別意識から通称名に身を隠さざるを得ない、悲しい差別体験が根底に身に染みている一世たちの苦労の処世の所以であろう。今日の若い世代には韓流ブームも手伝って、陰湿な差別感情もさほど感じられない時代になったことを、一世たちが見たら驚くだろう。

更に、一世から二世、三世と世代が進み、帰化する在日も増えている現在は、自分が半島のルーツを持つ民族性すら知らない在日の子供たちがいるくらいだ。日本人であれば、韓国人であれ、何の国籍であれ、国籍なんて紙切れ一枚の縛りに過ぎず、大切なのは自分のルーツを紡いできた民族性なり文化の継承を、誇りをもって生きることだ。

大和言葉を大切にせず日本文化に触れることは不可能だろう。

同様に、何世代も継承記録された先祖の姓を名乗れない韓国人が、韓国文化に触れることには無理であろう。では、ややもすれば日本への造詣が深い日本人にも成れていない在日は、一体どこに自分の拠り所を求めて、生きていけば良いのだろうか。

日本社会での名前の持つ意味を深く考えさせられることがある。名前は、在日マイノリティーとしてのアイデンティティーを保持する最低限の証であることに、私は幼いころから意識せざるを得なかった。周囲は、私が[通称名]を使い限り私の存在の根深いところまで意識しない[日本人]として扱い、私も韓国や朝鮮を封印せざるを得ないことに不自然極まりない感情に抑圧されて、何とも居心地の悪い精神状態になるのだ。それはやはり苦労して生き延びてきた祖父母や両親から受け継いだものを誇りに、また拠り所として生きているからだと思える。被差別意識で[通称名]を使いながら、狭い、限られた小さな在日社会から、日本社会に不平不満を並べるくらいなら、外観から見分けが付きにくい在日韓国人としての証としての[名前]を大切に生きるしか、方法が無いではないか。しかも、それが一番自然なことなのに、在日自身が名前を使い分けている不自然さに違和感を持ちながら、中途半端な生き方しかできないとも思う。そして実際に、表裏なく生身の私自身をさらけ出すのに、名前の持つ背景からアイデンティティーそのものを受け入れて出逢った素晴らしい人々や経験が、日本社会の素晴らしい側面を再認識できるのだから、在日にとっての名前は、出逢いの[踏み絵]でありかつ自身の[浄化フィルター]の要素があると思う。この確信に至るまでの経験や出逢いは、必要条件が有るような気がする。それは、**【強さ】**だ。自身への生きる為に備えなければならない圧倒的な強さだ。

自分自身の全てを生身で表現し、勝負する前に、周囲からはバイアスを掛けてみられる先入観や固定概念という壁を取り除いて、はじめて同じ土俵に上げられることを幾度となく経験してきた。幼いころから私個人の前に、意識の如何にかかわらず、それこそ私の一挙手一投足は、韓国人の～、なんてレッテルで常に見られるので、韓国を背負っている勢いで行動をせざるを得なかったのは、内にある**【強さ】**への問答と葛藤の連続であった。～のくせに、～だから、のような先入観を取り除き、初めて私自身の個性と感性で勝負する生身の等身大の声が周囲に届くことを知ったのは、特に中学校を進級するにあたり在日社会から切り離されたどっぶりの日本社会に飛び込んでからが顕著だった。

【今回は…多感な小～中学時代、出逢いと運命の変化…につづく】

※いかなる人間も生を奇跡的に受け、全うするまでに意味を持ちドラマがある。死を強く意識させられた我が身の病気は、30年近く(教育の一端を担ってきた私塾に懸ける夢を、自身の宿命から根底にあった事に、大き気付かされた気がする。教育の可能性を信じながら、次世代に繋ぐ責務を探っていきたい…。